

特選

2009

金融担当大臣賞

「金融と経済の明日」第7回高校生小論文コンクール

アート産業で活性化

大阪府・東大谷高等学校 1年 西澤 友香梨

日本の心を動かす産業。私が注目するのは美術産業です。心を動かすには膨大なエネルギーがいるでしょうが、アーティスト達はそれだけの志気を持っていると思います。また、不況やインターネットの影響で、美術産業は大きく変貌^{へんぼう}してきているといいます。美術産業が一般の日本人の現状に合ったものになってきているのなら、美術を頑張る人の熱意が、もっと日本人に、新しい買い手に届いて、日本の活性化につながるのではないかと。そう思って、新しい美術産業の特徴や取り組みを、絵の先生や、ギャラリーのオーナーさんや、作家さんに様々な質問をさせていただいたり、図書館で本や司書さんに教わったりして、私のイメージを考え直そうとしました。

どういう風に美術は変わってきているのでしょうか。私が絵を習っている先生に、「武士は食わねど高楊枝^{ようじ}では、アーティストは生き残れない」という話を聞いたことがあります。作品作りに専念するだけでなく、社会のこと、売ることも少しは考えないといけないとか。アーティストがお金のことを考えるのは悪いといった信仰を耳にするのに、どうしてでしょうか。まず、画商が衰退してきて、インターネットでの作品の売り買いが進んでいることが挙げられるそうです。アーティストが自ら営業しなくてはいけなくなったのです。また2009年9月16日のNHKの朝のニュース「おはよう日本」で、「不況で変わる“絵画ビジネス”」という特集が放送されました。客層を広めることで不況を乗り越えようという取り組みが紹介されていました。初心者のための画廊めぐりツアーや、10万円以下の絵画に力を入れ始めたデパート、1万円以下でも買える絵を測り売りするインターネットのショップが紹介されていました。専門家のコメントでは、この流れはチャンスだということでした。私もアーティストと一般の人の距離が近づいてきているのではと感じました。

アートは心を落ち着けたり、盛り上げたりする力があります。私はこの二つの力に注目したいです。疲れや病を癒せられるアートは、現代の日本人にとってもニーズがあるはずで。工事の騒音でうつ病になったおばあさんが、絵を描き続けて治ったのを見たことがあります。美術作品を鑑賞する方法でも、自ら制作する方法でも、日本人の心を落ち着けられると思います。また、日本や地域を活性化するアートは、安い元手で人を集め、盛り上げることができます。絵の先生が言うには、その気になれば河原に捨ててある廃材から芸術作品を作ることだってできるそうです。それにイベントにアーティストを呼んでもお金がかからないそうです。(アーティスト自身の経済状況がとても悪いからです。)この二つの例を紹介します。

雑誌の『アートムーブ 50号』¹⁾を読んでいて、気になる記事を見つけました。ギャラリーオーナーのリレー談話というコーナーがあり、今回のタイトルは「アートの処方箋^{せん}」でした。「Gallery H.O.T」のオーナーの女の人が執筆されていました。〈パリを旅行中に体調不良に襲われ、休憩するために駆け込んだ美術館の作品を見入っているうちに、体調が回復した体験がきっかけで、ギャラリーをオープンした〉という話が面白かったので、最後まで読んでみました。彼女はギャラリーをオープンする前は薬剤師さんだったそうです。続きの話は次のような内容でした。——「アートがもたらすプラセボ効果」という展覧会を毎年開いている。プラセボ効果とは、医薬的には効果がない乳糖などを、医師が薬と信じ込ませて与えると、薬理効果のある薬と同様の効果があることを言う。健康という切り口から、初めてギャラリーに来た人もいる。副作用の強い薬を増やすより、アーティストとギャラリーによって処方されるアート（薬）をもっと人に見つけて欲しい。——私はこの考えを詳しく知りたくなって、彼女に会いに行くことにしました。放課後、雑誌に載っていた電話番号に電話をかけると、快諾してくださり、さっそくギャラリーに出向いて、話を伺うことができました。

2009年の2月に行われた、「アートがもたらすプラセボ効果・第7回」の資料を見せてもらいました。「処方箋」を1枚貰^{もら}いました。アートがもたらすプラセボ効果の展覧会場を訪れると、まず処方箋を記入するそうです。自分の症状を記入し、作品を観ていきます。その症状改善に効果があると思われる作品があれば、その作品番号を、「効果がある」「少し効果がある」「ない」「わからない」に分けて記入していきます。この鑑賞の仕方は、面白いな、どんな人でも捉えやすいだろうなと思いました。ちなみに、クライアントが作品を制作し、治療者との対話で自分を発見する「芸術療法」とは、全くの別物です。その処方箋を集計した冊子もいただきました。例えば、「肩こりに効くのはこの作品だ」と処方箋に記入した合計人数は38人で、作品番号1が効くと選択した人は20人のようです。52.63%の人が、1番が肩こりに効くと思ったようです。1番の作品は写真で見ると、濃い色の木で作られた作品で、実物はどういうものだろうと思いました。他にも、疲れ、頭痛、精神面、冷え症、腰の痛み、胃の不調に効くのはどれかというデータもありました。そして、オーナーさんは言いました。「アートの処方箋は、健康産業なのよ。」こんな話を聞かせてもらいました。例えば、ダイエットや健康などのために、サプリメントを飲む高校生がいます。サプリメントは比較的安いこともあって、売れに売れています。ただ、サプリメントのように、口から飲む薬は、何かしら副作用が起こることもあるのに対し、目から脳へ働かせる薬は副作用がありません。そもそもサプリメントの法律上の位置付けは、薬ではなく食品であることも知っておくべきです。サプリメントの代用品として、アートが使えるのだと、教えてもらいました。アートがもたらすプラセボ効果に毎回出品している作家さんにも質問させてもらいました。「体や心を癒す作品は、どのように作るのですか？」と聞きました。「まず医療の本を2冊ぐらい読んだよ。それから、原因を解消するものから得たインスピレーションを整理したりしますね。」肩こりに効く作品なら、シップからのインスピレーションを参考にすること

もあるらしく、驚きました。「自分を傷つけるほどだよ。」気持ちのバランスをとるのが難しいと作家さんは教えてくれました。そこでオーナーさんが言いました。「普通、新薬を開発するには10年かかるのよ。それを作家さんは2か月でやらないといけないのよ。」ギャラリーでお話しさせてもらった人は、何だか雄弁に自分の仕事のことを説明してくれて、新鮮でした。私には、パワーがある大人だなあと映りました。

数年前、近所の商店街で、フェイスペインティングの手伝いをした時のことです。フェイスペインティングとは、顔や身体に専用の絵の具で絵を描くことです。絵を描ける人達が座る机に、沢山の人が並んでくれました。その日は縁日でした。私が描いて成功したのはカブトムシです。小さな男の子の腕に、カブトムシをとまらせました。完成した時、その子のお母さんが、「よかったね！」という、男の子はにこりと笑いました。アンパンマンを描いてくれという注文は失敗しましたが……。女の子は蝶を頬ちように描くと喜んでくれました。大人の人には花などを描きました。「アート」への抵抗は、そこにはありません。成功すれば嬉うれしいし、お客さんも笑ってくれる。縁日に来たお客さんの、思い出の一つになったのではと思います。縁日のようなイベントだけでなく、水都大阪2009などのように、自治体が大規模にアートを使って町おこしをしたり、これから様々な可能性があるようだと感じます。アートはハレの日の非日常感を盛り上げて、人を集め、賑にぎやかにすることもできると思います。

ちなみに、日本にはアーティストが沢山います。『統計でみる日本2009』²⁾には、「生活の余裕とともに著しい芸術家の増加」という説明文が載っています。『文化経済学の可能性』³⁾という少し古い本には、日本とフランスの芸術家の分布を比べた表があります。日本の美術家の就業者数は2万2,800人(1985年国勢調査)で、フランスの美術家の就業者数は1万4,020人(1982年人口センサス)ということは、日本のほうがアーティストが多いのです。この人数を有効に活用するべきだと思います。

日本経済と心を活性化させる将来有望な産業、美術産業。今回考えてみて、エネルギーがあると実感しました。これからだんだん時代に合った産業になっていくにつれ、エネルギーの向け方が分かりやすくなり、新しいファン層による新たな経済活動が活発になるだろうと思います。

事務局注 1) 山下裕子監修 『アートムーブ 50号』ポテトチップス編集部、2009年

2) 『統計でみる日本2009』日本統計協会、2008年

3) 池上惇編 『文化経済学の可能性—文化政策と舞台芸術の現状と未来』芸団協出版部、1991年

